みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

フィンランドの子供のことば遊び (ことば遊びのダイナミズム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008415

20

フィンランドの子供のことば遊び

庄司博史

はじめに

一口にことば遊びといっても，その定義は容易ではない。日本語によることば遊びだけでも，逆さことば，早口ことばなど言葉の音面を利用した遊びから，なぞなぞのように意味の面を利用したもの，あるいは洒落，語呂合わせ，地口など，意味と音のすり違えを利用したものなど，すぐ思いつくものだけでも数多い。このほか，言葉を用いた遊びを広義にとらえると，川柳や俳句など文学の部類に入れられるものとの境界ははっきりしなくなってくる。

これらのうち，早口ことば，謎など，ことば遊びの形式のいくつかは言語や文化にそれほど束縛されず現れると考えられるが，その内容や手法の詳細となると文化や言語に強く支配されていることは言うまでもない。さらに漢字の字遊びや語呂合わせによる数字暗記法など，遊びの形式やジャンル自体が他にはそれほど見られないものも多い。

しかし異言語によることば遊びはこのような点で異なるだけでなく，しばしば説明されたあとでも，面白さが非常に理解しにくい場合がある。謎一つをとっても，我々の社会と，いわゆる未開社会では，ユーモアの意識にも大きな違いがある[VIRTANEN 1972：220]ことも指摘されている。これは，ユーモアの意識が言語習慣や文化・社会制度と深く結びついていると同時に，独特のユーモアのコードが存在するためとさえ思える。

これと幾分同様のことが，大人のことば遊びと子供のことば遊びを比べてみた場合にいえるようである。たとえ同じ言葉を用いた場合であっても，大人のことば遊びを子供が用いるとは限らぬし，子供の間で愉快で面白いと思われているものが大人にとって必ずしもおもしろいとはいえない。ことわざやたとえを子供が用いないのと同じように，「てぶくろ」を逆に言わせて相手を叩く権利をえたと喜ぶ大人もいない。また「あーぶくたったー煮えたった，煮えたかどーだかたべてみよ，むしゃむしゃむしゃ」と，意味の分からない文句を幾度となく繰り返し有頂点になっている子供のすがたを見ることもある。このような子供のことば遊びの例を見ていると，子供には大人とは異なるユーモアと言葉にたいする感覚があると考えざるをえない場合がある。

ここに事例として取り上げるフィンランドの子供のことば遊びでは，いくつか代表的なものの例を挙げ，以上のような観点から若干の検討を加えたい。子供の遊びには，定型化した言葉を伴うものが多いが，それ自体が遊びの要素をもつことがあるため，言葉のみによる遊びとは特に区別しない。

1．フィンランドの子供とことば遊びの研究

フィンランドにおいて，家庭あるいは戸外でも常に親や保護員の監視下にあった幼児期を離れた6，7歳の子供たちの代表的な遊び場は住居の周囲の庭と学校である。それぞれで子供たちは，遊びの集団を形成し，遊びの文化を築いてきた。学校においては学年，男女別に集団が形成されるが，特に性による集団の分化はそれぞれの遊びに重要な意味を与えている。庭の遊び集団において，その単位は近隣の子供たち同志で，6，7歳から12歳までの異年層によって構成され，がき大将や年上のものが威張り，下のものはいいようにされながらも，豊かな子供文化が連綿と継承されてきた場でもある。

このような集団は遊びの主体であると同時に，子供にとっては周囲の大人の世界とは独立した，あるいはそれと対抗する子供の世界も作りあげている。家庭あるいはその周囲において，子供たちは両親，隣人の小言，叱責にさいなまれ，学校では規則に縛られ教師には頭が上がらない。そして全てを通して見えてくるのは，子供たちを訳なく従わせようとする社会の道徳や，警察，学校，教会，金持ちなどの権威である。子供たちの世界で，かれらの可能な反抗がこれらに向けられるのは当然である。

子供たちの言葉を用いた遊びも，このような場での遊びのなかで伝承されてきた。しかし遊びの単なる付随物としてではなく，多くの遊びでは不可欠の要素としての位置を占め，またその脈絡のなかで面白さをかもしだしているため(例えば鬼決め歌—鬼に当たりたくないというスリルがあって初めて面白さがうまれる)，純枠に意味と音そのもののもたらすおもしろさを楽しむことば遊びのみを，他から切り離し取り出すのは容易なことではない。

フィンランドにおいて，ことば遊びのうち一般的な謎，ことわざや韻文伝承として重要視されてきたわらべ歌，子守歌などの採集は，他の口頭伝承と同様に早くから行なわれてきている。しかし特に子供の伝承としてのことば遊びの本格的な収集が始められたのは，1969年にフィンランド文学協会口頭伝承資料保管所が全国の中学校の生徒を対象にして行なった調査，およびこれと前後して行なわれたヘルシンキ大学口頭伝承学科の学生による調査以降である。これらの調査では，ことば遊びは子供のほかの遊びから切り離すことのできないものとして扱われている。子供のことば遊びを単に，口頭伝承としてではなく，子供にとって日常の最も重要な部分を占める活動である遊びという広い視野から，研究対象とするには，ことば遊びを，常にそれを用いる子供たちとそれをとり

まく周囲との諸関係においてとらえることが前提となってくる。したがって，フィンランドでは，いわゆる伝統的口頭伝承研究が怠ってきた，伝承の場，話し手と受け手の相互関係，心理的作用といったものの記録・分析が，当初から注目されてきており，子供のことば遊び研究は口頭伝承学のほかに，心理学，社会学の視点を加えた厚みのあるものとなっている。

言葉による伝承は一般にそのジャンル，内容，そしてそれらが演じられる状況や機能によって分類されうる。いっぽう遊びという広い観点からの子供のことば遊びの分類は，それらを伴う活動によって行なわれてきている［SANCHES & KIRSCHENBLATT-GIMBLETT 1976：66-67］。オーピー(Opie)夫妻が1950年代イギリスの子供のことば遊びを幅広い調査によりまとめた *The Lore and Language of Schoolchildren*［OPIE & OPIE 1967］では，それらを伴う遊びの形態ごとに，17の項目に分類している。上に述べたフィンランドの調査の結果として発表されたヴィルタネン（L.Virtanen）の *Antti Pantti Pakana*［VIRTANEN 1972］では，Opie夫妻の分類を簡素化し，大きく次のように分類している。庭での遊び，ひっかけ遊び，からかい遊び，押韻ことばの遊び，パロディー遊び，遊びことば，お化け話，呪い・迷信。ここでは，Virtanenの分類を参考にしたが，比較的短い定形化したものをことば遊びとして取りあげるため，散文伝承に属するお化け話をのぞき，その代り子守歌・あやし歌を分類項目に加えた。また，各項の定義とことば遊びの分類もVirtanenのものと若干異なっている。以下に，それぞれの代表的なことば遊びを内容・形式的に細分して紹介する(注)。

2．ことば遊び

1）子守歌，あやし歌など

一般に大人が，幼児に向かって，機嫌を直させ，落ち着かせるため歌って聞かせるものである。母親に抱かれ，あるいは父の膝で，繰り返し聞いた歌は，伝わってくる暖かさとともに幼い心に刻み付けられる。指遊び歌，膝ゆすりの歌など子供と大人が参画する遊び歌や，てんとう虫の歌など子供の注意を事物に引き寄せる歌，なだめ，諭すため繰り返し歌われる歌は，子供との伝達の手段であるとともに，子供にとっては遊びでもある。子供がよろこび，安心するのは，子供の持つ普遍的な音感を擽り，それに適応しているからであろう。しかしそれと同時に，子供の中にその言葉の韻律やメロディーの原型も習得され

ている可能性もある。この種の歌は大人から子供へと受け継がれていく伝承で，子供の遊び歌からは区別されることが多い［OPIE & OPIE 1967：1,7-8］。しかし，子供も口真似をしながらおぼえ，それにしたがって自ら口ずさむことも決して珍しくない。

膝揺すり歌 —— 子供を膝の上で上下に揺らす

Körö körö kirkkoon. papin muorin	Körö körö 教会へ，
penkkiin	牧師の奥さんの椅子へ
ruskealla ruunalla. valkealla varsalla.	茶色の雄馬にのって，白い仔馬にのって
mihinkäs mennään, kirkkoon mennään.	どこへ行くの，教会へ行こう。

サウナでの湯浴び歌

Repu repu reisiä,	ゆらゆら，あんよ
punaisia poskia,	赤いほっぺ
Pysy kotona konnan poika	家に留まれ，蛙の子
syö rusaa ruumenia. (KN12)	沢山もみがら食べなさい。

てんとう虫の歌（てんとう虫を見つけると飛び立つまで歌う）

Lennä lennä leppäkerttu	飛べ，飛べてんとう虫，
ison kiven juureen,	大きい石の下へ，
Siellä sinun isäs, äitis	そこではお前の父さんと母さんが
keittää hyvää puuroo. (KN39)	おいしいおかゆを炊いている。

泣く子をあやしながら

Katsos tuota tuhman suuta,	あの悪い子の口を見てごらん
kun on liuhan läyhällään.	じょうごの口のようにひらいてる。
Siihen on paha paikka panna,	蓋をするにはむずかしい
ilman on ilkeä pitää. (KN15)	しないでおくのもいやなこと。

これらの多くは，律，押韻，対句の点から一般にカレワラ韻といわれるフィンランドの古代歌謡と類似した形式を備えている。内容は古めかしく，必ずしも子供にとって理解可能とは思えないものが多くある。むしろ規則的な音の流れと，韻律を楽しむ（あるいは育てる）要素が多い。この点，次のグループといくぶん共通している。

2) 押韻遊び歌

言葉の意味内容より，もっぱら軽快なリズムや言葉の響き，規則的な形式の繰り返し，あるいは，異常な音の連続を口にすることだけでも，子供に楽しさと快感を与えていると考えられる歌がある。押韻のうち脚韻は，特に好まれているようである。内容はしばしば，他愛のないナンセンスなものから，子供にとって，必ずしも理解されているとは思えない，伝統的な韻文伝承と深いつながりをもつものもある。形式の繰り返しや聴覚的な快さを楽しむ要素は，他のグループに分類した，数え歌，占い遊び，鬼決め歌など遊び歌には，重要な特徴であるが，ここでは特に歌ったり，唱えたりすることが，中心となっていると思えるものを挙げる。

鎖歌

Oli ennen onnimanni.	昔長老がおりました,
onnimannista matikka.	長老からたらへ
matikasta maitopyörä	たらからミルクの輪
maitopyörästä pökylä. . . .	ミルクの輪から腐った木株. . .。

問答歌

Mitä tehtäis? Sika pestäis.	何しよう。豚洗おう。
Mikä sika? Maasika.	何豚。土（maa）豚。
Mikä maa? Isänmaa.	何の国（maa）。祖（isä）国。
Mikä isä? Taivaanisä . . . (KN57)	何の父（isä）。天の父. . .。

数え歌

Mikä yksi? Kirveen silmä	何が一。斧の目。
Mikä kaksi? Kaksi silmää päässä . . . (KN26)	何が二。頭にある二つの目. . .。

曜日歌

Maanantaina myllyyn mentiin,	月曜日に粉挽き小屋へ入った。
tiistaina kotiin tultiin,	火曜日に家に帰った。
keskiviikkona taikina tehtiin,	水曜日にパン生地作った。
torstaina leivottiin . . . (KN30)	木曜日にパンを焼いた. . .。

3) 遊戯歌

種々の遊びに伴う，あるいはその流れを導くための歌がある。遊びを始める歌，鬼決め歌，縄跳び歌など遊びの様々な段階に応じて歌われ，鬼決め歌などは，それ自体が緊張と興奮を与える遊びとなっている。人を順番に指しながら歌う選び歌や縄跳びの調子をとるための歌は，短い語による規則的なリズムをもっており，頭脚韻は歌の流れにめりはりをあたえている。内容は，一般にはある状況を描写したり，物の名をただ挙げつらねるものから，全く滑稽なもの，あるいは全く意味不明のものまであるが，総じて遊びとは関係がないことが多い [VIRTANEN 1972：150]。この種の歌は，個人が幾つもレパートリーにもっており，遊びやそのときの気分で使い分けられている。

鬼決め歌（一人ずつ指差しながら歌う。次の歌は殆ど意味をなしていない）
Enten tenten teelikamenten
hissun kissun vaapula vissun
eelin keelin klot
viipula vaapula vot. . .　(KN42)

現在の鬼決め歌

Ufo ajoi linnunrataa.	UFO が銀河を走った,
mittari näytti tuhatta ja sataa.	速度計は示した千と百,
yksi pyörä putosi pois! . . . (KN47)	車輪が一つおっこちた。

縄跳び歌

Lääkäri Läski käski	Läski（でぶ）先生がいいました
potilaan tulla sisälle.	患者に中に入るように,
potilaan painua pellolle　(KN53)	患者に外へ出るように。
omena oo. ompompompoo,	omena（りんご）oo, ompompompoo,
pila pala pois! (APP153)	腐った所はあっちへ

フレーフレー結婚式（とおりゃんせの一種）

Huraa huraa häitä,	フレーフレー結婚式
kello löi jo ykstoista	時計はもう十一時
keisari seisoo palatsissaan. . . (LP57)	皇帝は宮殿で立っている。

最後のタイプの歌を伴う遊びはフィンランドでは比較的珍しく，殆どが最近

大人の指導により広がったか，かつての若者の間で盛んであったダンス歌謡が子供たちの間に移ったものとされている［VIRTANEN 1981：56］。

4）はやしことば

相手，状況などに応じて存在する，冷やかし，からかうための言葉は数多い。いさかいや喧嘩の際に用いられるほか，鬼ごっこなどには不可欠の文句でもある。また，他人を挑発することで単調な日常生活に変化を与え，ドラマチックなものにする役割も指摘されている［VIRTANEN 1972：93］。一般的なものには，相手の名や身体的特徴をはやす遊びがある。また，子供社会の規範を逸脱する，告げ口するもの，大人につくもの，ひいきされるものなどに向けられるはやしことばもある。内容は簡潔で，形式も規則的な韻律を備えているのは繰り返し斉唱するためであろう。

Jarmoという名をはやす歌

Jarmo parmo pakana	Jarmo parmo pakana（異教徒）
istui oven takana,	ドアの後ろに座ってた，
äiti luuli kissaksi,	母さんは猫だと思い，
talloi Jarmon liffaksi.（APP112）	Jarmoをぺしゃんこにしちゃった。

太っている子に向かって

Läl läl läl läl läskipää,	Läl läl läl läl まぬけ（頭でっかち）
liian lihava lentämään.（KN50）	飛ぶには重すぎる。

一年生に向かって

Ekaluokkalainen,	一年生
kävelee kuin nainen.	女のように歩く。

告げ口した子に

kantelupukki kun kankattaa,	告げ口野郎がやかましく
ope ei rauhassa opettaa saa.（APP126）	先生教えていられない

けんかの相手に

Joka toiselle suuttuu,	怒りんぼ，
siltä järki puuttuu（KN52）	そいつの頭は抜けている。

また，このグループに属するもののうち異性や異性とつきあうものをはやす言

葉は，異性の認識と興味の印と見られる。

Minna se sitoo kengän nauhaa.	Minna は結ぶ 靴紐を，
Tommi se hyppää Minnan kaulaan. (KN50)	Tommi は飛びつく Minna の首に

はやしことばが，集団により，一定の個人や他の集団に向けられる場合は帰属意識の強化の手段となる［VIRTANEN 1972：234］。

5) ひっかけ遊び

相手を種々の方法で，ひっかけ，恥をかかせる遊びは子供のことば遊びのなかでは，非常に豊かな領域である。最もありふれた方法は，勝手な質問で相手の誤解や無知を利用して相手をひっかける遊びである。子供の単純な論理ではひっかけられたものは，負けになるが，目的はむしろひっかけたものの自己誇示にあることが指摘されている［VIRTANEN 1972：70］。

Pidetäänkö teillä verhoja?	君のうちではカーテンもってるかい？
-Joo.	―うん。
-Meillä ne pysyvät pitämättäkin.	―僕のうちでは（手で）もたなくてもついてるよ。

代表的なものに，なぞなぞがあるが，二重の意味を利用するもの，相手にわざと不快なものを想像させるもの，「像の冗談」など，論理的思考を裏切るものなど種々方法がある。流行性の強いものである点で，日本で一時流行った「かもめのジョナサン遊び」と通ずる。

Miksi linnut lentävät etelään?	鳥はなぜ南へ飛ぶか。
-Koska eivät jaksa kävellä. (KT41)	―歩いていけないから。
Mikä on suurin riisi?	一番市場大きい米（riisi）は何。
-Pariisi.	―パリ（Pariisi）
Miksi norsu menee hiiren hautajaisiin?	なぜ象は鼠の葬式に行くか。
-Hiiri on kuollut. (KP 83)	―鼠が死んだから。
Mikä se on?	それ(se)は何？
-Se on pieni sana. (KP 85)	―Se は小さい単語。

また，無知な相手に様々なことを言わせるように仕向け，恥をかかせる遊びもある。次の例では suukko は単に音が似ているだけで，何の論理的つながりもない。

Sano puukko.	—puukko(ナイフ)って言ってごらん。
-Puukko	—puukko。
Anna kullallesi suukko. (KN 50)	恋人にキス（suukko）おやり。

私も（Niin minäkin）というように命じておいて，

Menin kauppaan. -Niin minäkin.	店へ行った。—私も。
Ostin kalan. -Niin minäkin.	魚を買った。—私も。
Kala haisi. -Niin minäkin. (APP 81)	魚は臭かった。—私も。

Onko talonne tehty tukista vai puusta?	君の家は材木製か木製か。
-Tukista. (APP 75)	—材木製（tukista＝「髪を引っ張れ」）

（こう相手が答えると，相手の髪の毛を引っ張る）

これらに共通しているのは，言語の日常了解されている規範や意味を無視して，勝手に都合のよいものと結びつける点であるが，ひっかけられたものは，その論理的間違いを指摘したり抗議したりしないのが普通である［VIRTANEN 1972：71］。さらに特徴として挙げられるのは，別個のものが単なる音の類似により，簡単に結びつけられることである。

自己誇示の点では，冗談，笑い話もこの部類に属する。これらには性的，差別的話題など世間の倫理観に触れるものが多いが，ほとんどは大人のものの受け売りである［VIRTANEN 1972：222］。これらを理解し笑えるには，一定の言語的成熟や現実社会に対する知識が必要である。しかし，子供にとって，これらを知り，話してみせること自体が，無知のものに対して優越感を感じる有効的な手段である。

Mustalainen kauppaa asemalla kelloa. Valkolainen sieppaa ja vie mennessään. -Meni ostohintaan. (KT 14)	ジプシーが駅で時計を売っている。(ジプシーでない）男がそれを引ったくって逃げる。—仕入れ値でやられちゃった。

Äiti, oletko varma, että pizza tehdään näin? -Ole hiljaa, painu takaisin uuniin. (KT24)	母さん，本当にピザはこうして作るの。—黙って，オーブンに入ってな。

Mies meni keuhkokuvaukseen. Kuva tuli otetuksi liian alhaalta.	男が肺レントゲン撮影に行ったが，下のほうをとってしまった。
-Keuhkoputki oli hyvä, mutta keuhkopussit mitättömät. (KT32)	—気管のほうは良いのですが，両方の肺が小さすぎますねえ。

早口ことば，逆さことば，真似ことばなども，音の遊びであると同時に能力誇示にはよく用いられる。

早口ことば

mustan kissan paksut posket	黒い猫の厚い頬

回文

innostunut sonni (KP 11)	いきり立った雄牛

真似ことば。他言語の音構成を真似ながら，滑稽な文を作る。日本語の音節構造をまねたものが多く，リッポネン（Lipponen）では24例挙げられている［LIPPONEN 1988：6-7］。

日本語の靴屋は、と問いかけておいて。

hajosiko monosi (KP6)	あんたの履物つぶれたか

語頭の音節を入れ替える

Pietari Suuri	ピヨトル大帝
-suutari pieri (KP 11)	—靴屋がおならした

6）パロディー（替歌）遊び

よく知られた歌や詩の替歌。利用されるのは，コマーシャルソング，賛美歌，愛国歌，クリスマスソングなどのほか情緒的な歌や倫理的な歌が多い。あざけりの対象とされるのは，歌そのものの背景にある社会的な権威や道徳のほか学校，教師，大人，車などである。子供たちは，パロディーによりこれらの権威をおとし，反抗心を満足させると同時に，歌うスリルを味わうこともできる。フィンランドでも盛んな罵りことばとともに，口にすることで，禁じられた領域に立ち入ることは，勇気の証明でもある。

主の祈りのパロディー

Isä meidän, joka söi viimeisen leivän, hänet tappakaa. leipä takaisin antakaa. amen. (APP 173)	最後のパンまで取ったわれらの主よ，彼を殺したまえ，パンを返したまえ，アーメン

クリスマスソングの替歌

Joulupuu on varastettu. poliisi on ovella. joulupukki hirtettynä riippuu kuusen oksalla. (APP178)	クリスマスツリーが盗まれた。警官がドアにやって来た。サンタは首を吊されぶらさがる，ツリーの枝に。(元歌では，ツリーができた。サンタはドアにやって来た。蠟燭がぶらさがる，ツリーの枝に。)

自動車のコマーシャルのパロディー

Wartburg-idän ihme, lännen kauhu. perästa nousee sankka sauhu (KP23)	ヴァルトブルク（東独製車），東の奇跡，西の恐怖，尻から昇る濃い煙

年少の子供の間で最も普及している「ノアおやじ」では，賢明で善良なノアおやじが，いたるところで良識を裏切る滑稽な行為をする。形式，内容とも単純でありながら，大人の社会に対するささやかな反抗がこめられておりパロディーの典型とされている。絶えず新しいバリアントが生まれているが，用いる年齢にしたがい内容の過激度も増すようである。

Ukko Noa, Ukko Noa oli kunnon mies. Kun hän meni myllyyn, sika puras pyllyyn. Ukko Noa, Ukko Noa oli kunnon mies. (KN49)	ノアおやじはまともなおやじ， 粉挽き小屋に行ったとき，豚がお尻にかみついた。

7）秘密ことば・遊びことば

一定の規則に従い，語を変形させ，第三者に理解不能のことばをやり取りする。大人のあいだでも見られ，また世界的には行き渡った現象らしいが，多分に儀式性，あるいは特定の職業集団の秘密ことばとしての性格が強かったようである[OJANSUU 1916：80-85]。子供の場合は，秘密の内容を伝達することより，第三者への嫌がらせや集団への帰属意識強化に重点がある。Ojansuu はフィンランドの秘密ことばの形式として，三つのタイプを挙げている。1）語の間の音を入れ替える。2）一定の接辞を語頭や語末あるいは語の全ての音節の間にはさむ，3）語の音節を入れ替える[OJANSUU 1916：85-89]。実際は，これらの組み合わせや多くの接辞により，バリアントは限りない。

ponnaan meis (mennään pois) (あっちへ行こう)

*ko*nami*ntti ko*insö*ntti ko*menano*ntti*. (私はりんごを食べた。)
(minä söin omenan)

8) 行動に伴うことば

子供たちの行為のなかには，一定の歌や文句に伴われるものがある。あるものは，季節ごとに繰り返す行事であり，あるものは日常，非日常の行為であるが，子供にとっては重要なものである。エイプリルフールに誰かをひっかける際に唱える文句は季節の行事の行為を導くものであり，水につかったり，坂を橇で滑り降りる際の掛け声は，遊び歌と同様に種々の行為に勢いをつける効力がある。

水につかる時の掛け声

Yks kaks kolme, istu isän polvel!	一，二，三，父さんの膝に座れ,
Äiti sanoi : Älä istu!	母さんは言う，座ったらだめ,
Isä sanoi: Istu vaan! (KN55)	父さんは言う，座っていいよ。

挨拶，感謝，要求，約束など日常の行為に伴う文句は，様々な状況における子供の行為に一定の枠を与え，相互関係においていくらか緩衝的役割も果たしている。特に子供の間で交わされる物のやりとり，約束，真実の断言に伴う文句は，子供の言葉による表現能力の不足を補い，あるいはそれに替わる儀式的な性格を帯びたもので，それ自体言語行為といえよう。

他人のものをねだる歌

Kuru kuru kuppiin.	kuru kuru コップへ
vaivaisen vattiin!	不自由なものの容器へ
Joka köyhälle antaa	貧しいものにあたえると
se pääsee taivaan rantaan (KN36)	天国に行ける

他言を禁止する歌

Sip sip sirakoille,	Sip sip ニシンへ
toinen puoli torakoille,	他方はごきぶりへ
Elä sano torakalle,	ごきぶりに言うな
torakka lyöpi korvalle! (KN39)	ごきぶりは横ツラをひっぱたくぞ

9) 呪い・予言・占い歌

子供たちは様々な状況に応じて，危険の回避や幸運を願う呪い(指の十字架，四葉のクローバー，親指を立てる）による傾向があるが，文句を唱えることも多い。これらも，言葉による一種の行為である点において，上のグループにふくめることも可能である。水にはいるまえ，水の精を追うため歌う歌，大きい魚が釣れることを願う歌，好天を願う歌等がある。

水の精を追う歌

Hyi näkki maalle, minä järveen.	Hyi, 水の主は陸へ，僕は水へ。
Näkki rautaa raskaampi,	水の主は鉄より重く，
minä lehteä keveämpi. (KN32)	僕は葉っぱより軽い。

また，ボタンや縄跳びで跳んだ数により，将来の職業や結婚相手，子供の数を占う文句もある。

Pappi lukkari talonpoika kuppari	牧師　先生　農民　治療師
rikas rakas köyhä varas	金持　恋人　貧乏　泥棒
keppikerjäläinen (APP159)	物乞い

唱え文句によっては，古代の信仰伝承の名残を残すものもあるが，未知で不安な現象を知覚可能なものや言葉による意志と結びつけてしまう子供に共通した心理が，古い伝承の保存と，次々に誕生する新しい伝承の背景にあることは疑えない。

3．子供のことば遊びの言葉とユーモア

子供のことば遊びを，おもにそれらを伴う活動により便宜的に九つに分類したが，ことば遊びは子供にとって単なる暇つぶし以上の役割を果たしていることが分かる。しかし，ことば遊びの全てが決して，それぞれのグループに明瞭に分類されるわけではない。一つのことば遊びがいくつもの活動に伴って現れるのはきわめて日常的なことで，予想さえ困難である［SANCHES & KIRSCHENBLATT-GIMBLETT 1976 : 67］。一年生をからかう歌のように，はやしことばとして分類されたものが，坂を橇で滑るさい勢いをつける歌として歌わ

れたり，鬼選びの遊び歌がただもてあました暇を埋めるために唱えられることもある。ボタンを数えながら，将来の職業や結婚相手を占う歌もあやし歌として歌われた場合，指遊びの歌と本質的に変わるところがない。

これら種々の活動における遊びことばの役割は本来強く関連しあっていて，用いられる場により一領域が浮上してくると考えられる。その背景にあるのは，子供のことば遊びに潜む子供の言語感覚ともいえるいくつかの特徴である。そのなかで，特に重要な役割を果たしているのは押韻である。さきに述べたが，はやしことばで，相手を不快な事柄と結びつけ，あるいは遊び歌で滑稽な状況を歌う面白さを，押韻のかもしだす愉快さ，楽しさと切り離すことは不可能である。これは，ほかのことば遊びについても多かれ少なかれ言えることである。

子供のことば遊びのなかで，押韻の滑稽さをかもしだす効果についてヴィルタネンはこう述べている［VIRTANEN 1972 : 224-6］。

「もし体験者である学童の立場からユーモアをとらえるなら，両立しえない二つの概念を，押韻によってつなげることは，滑稽さを生み出すもののうち中心的なものであるといえる。」

しかし，押韻が子供のことば遊びと切り離せないのは，恐らくそれよりもっと基本的なところにある。押韻は，子供にとって，理由もなくただ面白く心を引きつけるものであるという［OPIE & OPIE 1967 : 17］指摘は重要である。子供にとっての「言葉」は，大人（少なくとも近代社会の）にとってのそれとは異なる性格をもっている可能性がある。言葉は本来，音により実現され，音により伝承されるものであったことは否定できない。しかし，文字と書きことばの存在する社会では，我々は音を意思を伝達し，自己を表現するための単なる手段としかみず，ほかの可能性は無視しがちである。近代社会では，元来，口誦文学であったはずの詩さえもが，韻律をほとんど無視した自由詩として存在しうる。しかし子供にとって，規則的リズムの軽快さ，押韻によるこころよい音の響き，音の強さ長さ高低などのいわゆる韻律的要素は，それらを言語から排除した分節的部分とともに，重要な役割を担っているのであろう。いくつかの例でも見たように，情報的には取るにたりない歌をただ歌うために歌い楽しむ場合があるのは，そのような感覚的に子供の心に訴えかける力があるに違いない。そして，Opie 夫妻の指摘するように，言語能力の十分に発達していない子供にとって，押韻詩は，未知で予期せぬ状況を切り抜け，静寂を破り，深い感情を覆い，あるいは激しい興奮から湧きでてくるものでもある［OPIE & OPIE 1967 : 18］。

子供のことば遊びには，大人の文芸作品のように，芸術的志向性は恐らくな

いが，言語機能論において言う感情表現の機能と詩的な機能とが，伝達機能と未分化の状態で存在するといえよう。またこれは川田が主張する，言語との音楽の境界を行き来する無文字社会の口頭伝承の示唆する音の重要性と通じている［川田 1985：8-11］。無文字社会において口頭伝承の持つ重要性はここであらためて強調する必要はないが，そのような社会では，伝達の機能を担うのは，音声言語の分節的側面と韻律的側面総体である。子供社会も文字に頼らぬ文化を継承している点では一種の無文字社会である。

本来つながりの無いものが押韻により連合軸に置かれるのは，恐らく子供にとっては同じ響きを持つ言葉同士の必然的関係が感じられるからであろう。幼い子供は英語の cat を意味的に近い dog や lion より音韻的に近い mat や hat と結びつける［SANCHES & KIRSCHENBLATT-GIMBLETT 1976：67］。同じように言葉の意味と音との関係も，大人とは異なる目で見ていると思われる。大人は，少なくとも理屈のうえでは，音と意味が偶然的な関係にあることを知っている。しかし子供にとっては，言葉とものの本質には必然的な関係が存在している。だからこそことば遊びでは，おかしく，奇妙な音の組み合わせが好まれる。また，言葉とものの恣意的つながりにしばしば新鮮な興味をしめし，それで遊ぶこともできる。しかしパリを（Pariisi），世界一大きい米（riisi）といって笑う子供のユーモアを全ての大人が共有しているとはいえない。

また数々の呪いことばや占い歌などは言語の呪性信仰と結び付いている。これらは大人の世界でも決して珍しいことではないが，「お化け」を口にすることを恐れ，約束ことばを好む心理とともに，音声として実現される言葉と事物との関係を直感する原始的な感性の現れであることは疑いない。

子供のことば遊びの特徴は，また独特のユーモア感覚にもある。幼い子供の「冗談」がしばしば大人を笑わせるのは，それが全く冗談になっていないためである。かつて，フィンランドで三歳の子供が面白い冗談といって話してくれたことがあった。「2人の男の人が橋を渡っていて，1人の人は帽子をかぶってた」。本人の笑いと役立たずの冗談に笑ってしまったが，決して彼の笑いを表面だけの作り笑いで済ましてしまうことはできないと思う。ヴィルタネンは子供たちに笑いを生じさせる主な状況として次の四つを挙げている［VIRTANEN 1972：222］。1.自己誇示，2.滑稽な組み合わせ，3.精神的負担からの解放，4.不確実であいまいな状況。事物の滑稽な組み合わせや予期しない展開などが子供たちに直感的にもたらす笑いは，遊び歌やはやしことば，替歌など子供のことば遊びの多くに見られるものである。ここで押韻の果たす役割についてはさきに触れた。

代表的なユーモアのジャンルは，自己誇示のことば遊びとして挙げた，いわ

ゆるひっかけ質問やなぞなぞである。これらの特徴は，一般に日常の数々の慣習的な言語規範を破ることにある。語の多義性はコンテクストによって限定され，表現は語用論的に解釈されているが，子供のことば遊びでは，このような日常言語の規範を無視し，両義的な解釈の可能性を極限まで遊ぶものが多いといえる。謎のうちの多くは，謎のパロディーともいえるもので，謎というジャンルまでが，見せかけの論理性によってひっくりかえされる。また言葉の記号性を否定し，音や字レベルの質問に切り換えてしまうメタ言語的視点から言葉を遊ぶこともできる。

ユーモアの感覚や理解の度合は，子供の言語・心理的発達と深く結び付き，用いられることば遊びは年齢により異なる［KORKIAKANGAS 1981：36］［VIRTANEN 1972：220］。子供たちの謎やからかい言葉も語の選択が恣意的で表現形式が稚拙なため，大人には面白く感じられないことがある。相手の返答を押韻で不快なものと結びつける遊びは6，7歳までで，9，10歳では子供じみたものと受けとるという［VIRTANEN 1981：134］。謎のうちでも，低学年では，同音語を利用することが多いが［KORKIAKANGAS 1981：36］［SUTTON-SMITH 1976：115］。なぜ一方では，別の意味を用いる必然性があるかは，説明されない。一方，謎のパロディーや多義的な冗談などは，低学年の子供には理解の限界を越えている。いわゆる「像の冗談」を幼児はそのまま信じ込んでしまう。それが冗談であり，さらに謎のパロディーであることが分かるのは，一定の知的レベルを前提にしている。またメタ言語的謎も比較的後の段階になって理解されるという［KORKIAKANGAS 1981：63］。しかし勝手な謎にひっかけられたものはその非論理性に抗議もせず，難解な冗談に煙に巻かれたものは説明を乞うことはしない。彼にとって，唯一の仕返しは自分がされたように，次の犠牲者をみつけることである。

ユーモアとして子供たちの数々の精神的要求に答えながら，しばしばこれらのことば遊びが嘲笑し攻撃の対象としているのは，子供たちを圧迫しているものである。数々ある冗談やパロディーのたぐいが直接攻撃する相手のほかに，「大人はしたい放題をしても罰せられず，子供には許されない」理不尽な論理や規則がある［KIVELÄ 1982：8］。言葉でさえ，学校では，教師から一方的にあたえられる文法や一定の価値観に従うことを子供たちに要求する［LEIWO 1986：115-6］。謎のパロディーでは，相手の期待に反して，見せかけの論理で相手をひっかけるが，ここで安っぽく扱われる論理を寄りどころにしているものこそ，学校教育であり，世間で通用している論理である。ことば遊びは，これらを嘲笑し，またその規則を破ることで，日常の精神的圧迫を軽減し緊張をほぐす治療薬の役割を果たしているといえるかも知れない。

本稿では，フィンランドの子供のことば遊びを題材として，おもに子供の言語感やユーモアについて論じた。フィンランドの子供のことば遊びの伝統は，多くの点でほかのヨーロッパ諸国と共通している。これは，フィンランドが，これらと似通った文化土壌をもち，伝播が容易な地域にあることを考えれば驚くに足らない。しかし，中にはジャンルあるいは形式・内容において日本のものと非常に似たものも多くあった。異文化圏に属し，媒介とする言葉の構造さえ大きく異なる両者に見られる共通性は，子供の言語や心理の普遍性とも大きく関わっているように思える。今後この分野で，ほかの文化や言語との細密な比較研究が進めば，これらについて興味のある結果が期待できよう。

注

本論中挙げたことば遊びの資料の出典は以下の通りである。出典の記されていないものは，フィンランドでごく一般に用いられているものである。
(APP) = Virtanen 1972. (LP) = Virtanen 1981, (KN) = Lipponen 1984, (KP) = Lipponen 1988, (KT) = Kivelä 1982.

文献

KIRSHENBLATT-GIMBLETT, BARBARA and SHERZER, Joel
1976 Intr luction. Kirchenblatt-Gimblett (ed.), *Speech Play*, pp. 1-16. Philadelphia : University of Penssylvania Press.

川田順造
1983 「口頭伝承論 I」『社会史研究』第二号，日本エディタースクール出版部，1-133 頁。

KIVELÄ, Marjut
1982 *Koululaishuumorin tyyppiluettelo*. Helsingin Yliopiston Kansanrunoustieteen laitoksen toimite 7. Helsinki.

KORKIAKANGAS, Mikko
1981 *Pikku Kalle ja ujo piimä: Kielellinen ja kognitiivinen prosessointi kouluikäisten lasten huumorissa*. Suomen Sovelletun Kielitieteen Yhdistyksen Julkaisuja 31. Jyväskylä.

LEIWO, Matti
1986 *Lapsen kielen kehitys*. Helsinki : Gaudeamus.

LIPPONEN, Ulla
1984 *Kuukerinuppi*. Helsinki:Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
1988 *Kilon poliisi*. Helsinki:Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

OJANSUU, Heikki
1916 *Suomen kielen tutkimuksen työmaalta* I. Jyväskylä : Gummerus.

OPIE, Ilona and Peter OPIE
1967 *The Lore and Language of Schoolchildren.* Reprint (first published 1959), Oxford : Oxford University Press.

SANCHES, Mary and KIRSHENBLATT-GIMBLETT, Barbara
1976 Children's traditional speech play and child language. Kirchenblatt-Gimblett (ed.), *Speech Play*.pp. 65-110. Philadelphia : University of Penssylvania Press.

SUTTON-SMITH, Brian
1976 A developmental structural account of riddles. Kirchenblatt-Gimblett (ed.), *Speech Play,* pp. 111-119. Philadelphia : University of Penssylvania Press.

VIRTANEN, Leea
1972 *Antti pantti pakana.* Porvoo-Helsinki:WSOY.
1981 *Lastenperinne.* Helsingin Yliopiston Kansanrunoustieteen laitoksen toimite 6. Helsinki.